文化庁月報

No.421
2003年10月号

CONTENTS

文化人の本音　河合隼雄文化庁長官対談　第19回　ゲスト 秋山喜久さん●関西経済連合会会長
関西から文化で日本を元気に……4
長官コラム　文化庁の抜穴……9

特集　関西からの文化発信
文化庁提言
文化で日本を元気にしよう……河合隼雄・10
施策紹介
関西元気文化圏とは？……文化広報推進室・12
「関西元気文化圏」における文化庁主催事業について……13
懇談会
河合隼雄文化庁長官と関西在住新進芸術家との懇談会……17

連載
わがまちの文化振興条例⑦
太宰府市文化振興条例……22
いきいきミュージアム　美術館・博物館事業レポート⑱
小野市立好古館（兵庫県）……24
著作権の保護とその例外⑦……25
子どもたちから見た伝統的建造物群保存地区
塩飽本島町笠島地区（香川県丸亀市本島町）……26
全国発掘調査ホット情報⑦
富士山麓の初期定住集落　大鹿窪遺跡（静岡県）……27
文化体験プログラム支援事業⑦
平成15年度実施地域の決定について……28
外来語の現状とその解決のために⑥
どういう外来語を言い換えるのですか……甲斐睦朗・29
探訪　日本の世界遺産⑦
世界文化遺産　白川郷・五箇山の合掌造り集落（岐阜県・富山県）…30
国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法―文化財鑑賞の手引き―⑦
縄文時代＝土偶の造形にひそむ意味……31
日本の伝統美と技を守る人々　選定保存技術保持者編31
小澤正実（甲冑修理）……32

文化庁ニュース
関西元気文化圏共催事業　伝統文化の祭典～人間国宝in関西～…33
平成15年度文化庁舞台芸術国際フェスティバル……34
日本語教育大会（関西大会）の開催……35
平成15年度第58回芸術祭について……36
第45回「教育・文化週間」について……37
第53回全国民俗芸能大会……38
第50回文化財保護強調週間……38

イベント案内
東京国立博物館
江戸開府400年記念特別展　伊能忠敬と日本図……39
京都国立博物館
特別展覧会　金色のかざり　金属工芸にみる日本美……40
東京国立近代美術館
特集展示　藤田嗣治……41
東京国立近代美術館
あかり：イサム・ノグチが作った光の彫刻……42
東京文化財研究所
第13回近代の文化遺産の修復保存に関する研究会
鉄道周辺施設の保存修復と活用……43
東京文化財研究所
第27回文化財の保存修復に関する国際研究集会
漆が語る国際交流……44

新国立劇場スポットライト……45
11月の国立劇場……46
芸術文化振興基金ニュース……47

今月の表紙
［左上］「夢発進、夢に向かって自分発進！」（関西文化芸術学院）
［左下］関西元気文化圏推進協議会設立総会
［右］『鑓の権三 重帷子（やりごんざかさねかたびら）』（国立文楽劇場）

題字デザイン　桑山弥三郎

文化人の本音

河合隼雄文化庁長官対談 第一九回●ゲスト

関西から文化で日本を元気に

秋山喜久さん●関西経済連合会会長

経済と「関西元気文化圏」

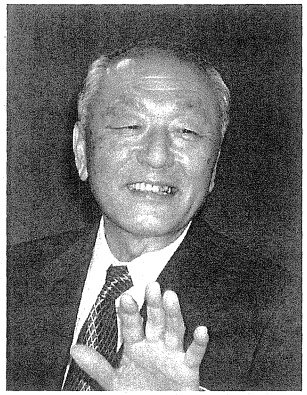
河合　日本は経済でがんばってきたんですが、頭を打ったとたんに日本中元気がなくなったような感じがありましてね。これをなんとかするために、まず文化から元気を出そうということで呼びかけてるんです。私は文化というのは、いわゆる芸術というように狭く考えず、生き方そのもの全部文化だというように広く考えたほうがいいと思うんです。

秋山　長官にはこのたび、「関西元気文化圏」を提唱していただいておりますが、我々も文化の必要性を感じて、いろいろな活動を始めていたときなので、非常にありがたく思っております。

　戦後、欧米に追いつき追い越せで、一所懸命効率化というか、大量生産・大量消費の生産活動、経済活動を行ってまいりました。そういう意味では、日本人の勤勉さによって、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」というところまできたわけです。

河合　ええ。これは成功したことは成功したんです。

秋山　ところが、最近、二つの大きな流れがあると思う。一つはグローバル化で、中国のように非常に安い労働力の国が出てきた。こういう国と対抗してもとても勝てないとみて、関西経済は真っ先に中国へ進出して、二五分の一のコストの中国で生産を開始しようとしたわけです。しかし、もう一つの本質的な変化があることに気がつくのがちょっと遅かったのではないかと思います。



あきやま・よしひさ　昭和30年関西電力株式会社に入社。53年企画部長、60年取締役、63年専務、平成2年副社長、3年11月に社長、11年6月には会長に就任し現在に至る。6年5月から8年5月まで関西経済同友会代表幹事、9年5月関西経済連合会副会長を務め11年5月会長に就任。また、14年に関西に拠点を置くシンクタンク4つが合併して誕生した関西社会経済研究所会長の職にもある。

河合　そうですね。

秋山　本質的な変化というのは、消費者が今までのように画一的な、安くていいものを使うということではなくなってきているということではないでしょうか。もっと個性的な、文化的なもの、あるいは環境にやさしいといった、開かれた個人主義に基づくニーズに変わりつつあるのに、それに気がつくのが遅かったのではないかと思います。

河合　今までの延長で出てきたのではなくて、質的に変わっている。それにみんな気がついて、そこに文化があるぞ、と。

秋山　そういうことを、我々もやっと気がついたところです。

河合　そう思われたところへ我々も申し上げたりして、おかげでこの「関西文化圏構想」というのは、みんながワッと集まってくれました。びっくりするほどで、ありがたかったです。

　今までどうしても仕事・働く人、趣味・遊ぶ人と分かれていたので、これを混ぜなければだめだと思うんです。

秋山　そうですね。

河合　そういう意味では、企業に入っておられる四〇代、五〇代の働き盛りの人が、文化になかなか触れていない。もちろんこの人たちががんばったから、日本は上まで上がってきたんですけど、そのあたりが「いっぺん、まあコンサートでも行くか」という具合に、そこをどうしたらいいかと思っているのですが、何かよい知恵はありませんか。

秋山　サラリーマンは単なる企業戦士ではなくて、文化人であることが必要だということで、みんなで芸術を見に行くことから始めてはどうでしょう。もともと関西の歴史的、伝統的な文化には、大衆性がありますからね。

河合　そうなんですよ。みんなが行ってワイワイ言いながら、できてきたわけですからね。

秋山　歌舞伎でも見えと掛け声で、一つの劇場が全体の演劇空間になるような雰囲気があるし、弁当を食べながらみんなでワイワイガヤガヤ楽しむのが文化の本質だと思うのです。

河合　私、この間からこんなことを思ったんですがね。例えば関西電力で、昼休みに食堂で室内楽を鳴らして、聴く人は聴いたらいいし、聴かない人は食事してたらええやないかというようなことをいっぺんやってもらって、本当におもろいと思う人はコンサートに行けよと。五％の人が行ってくれたら成功だと思うんです。初めからみんなに「行け、行け」と言っても、なかなか行かないでしょう。

秋山　そうですね。

河合　だから昼休みか何か、本当は研修の時間を使ってほしいんです。研修で経済の勉強ばかりしないで、研修時間にオペラ歌手が来て歌ったとか、狂言の人が来て狂言の説明をして踊ってくれた。〈ほんならおれも行こうかな〉というようなものを、いっぺん考えてもらえませんか。

秋山　まず見に行くことが大事ですので、みんなで連れ立って歌舞伎や文楽を見に行こうということでもいいと思います。

河合　それをやってもらえるとありがたいです。

観光と文化

河合　日本人は、例えばツアーを組んで外国へ行ったりしますね。逆に、外国の人が歌舞伎座で見るためにツアーでロンドンから来るというようなことを考えたらいいと思います。ホームステイしてもらうとか、大阪の町を味わってもらうとか、そういうこともいっしょにして、単に上っ面をなでるだけじゃない観光をもうちょっとやって、それに文楽とか歌舞伎とか、みんなかみ合わせればいいわけです。日本人といっしょに見に行って話をするとか、そういうことを考えたらもっと活性化すると思うんです。

秋山　おっしゃるとおり、ただ神社仏閣だけを見せるのではなく、日本文化のいいところを広く見せたいと思います。例えば、関空での時間待ちが四、五時間ある方に、できたらバスを出して、一幕でも歌舞伎や文楽を見ていただければいいのではないかと思います。

河合　それは大事ですね。そんなのを見せたら、「あ、大阪でこんなことをやってんのか」と思うでしょうし、観光をもうちょっと積極的に利用することを考えてほしいと思います。

秋山　外国の方が見たい日本というのは、我々が思っているのとはちょっと違うんです。この間、フランスのペッセルさんという教育省におられる哲学の先生が来られまして、京都を見ていただいたのですが、いちばん関心をもたれたのが錦市場（にしきいちば）です。あそこには生活があるものですから。

河合　私は友達が来たら連れていくんです。むちゃくちゃ感激します。今までは神社仏閣だけに過ぎたから、そこを何か考えたらどうでしょうね。

秋山　広く日本の文化、日本人の生活を見せるということですね。

河合　外国人が来たらみんなベッドに寝かさないかんと思ってるんですけど、布団に寝てもらったほうがよっぽど喜ぶんです。それから、私、この間、「だんじり」に行かしてもろたんですけど、あのお祭りは外国人は感激しますね。

秋山　あのエネルギーにですね。

河合　外国の人が「勇壮で美しい」と。ただワイワイやってるだけじゃなくて、美しいでしょう。外国の人にも単に見るだけじゃなくて、祭りに向かって岸和田の人がみんな盛り上がっていく、ああいう雰囲気を味わってもらうために、ホームステイしてもらうとか、そういうことを考えたほうがいいと思うんです。

秋山　畳の部屋に泊まることも喜んでもらえますね。京都などもそういう宿泊施設は少なくなってきたのでしょうが。

文化を生かす取組

秋山　文化を生かして、企業が何をするか、地域が何をするかということが我々の一つのテーマです。企業のほうでそうした動きがだいぶん出てきました。

フランスの自動車メーカー、ルノーの方に「ルノーのデザインフィロソフィーは何か」とたずねると、「それは、フランスらしさだ」という答えが返ってきます。ルノーに乗ったらなんとなくフランスを感じるというものが、ルノーの設計哲学なのだということです。「日本にはこんなにいいものがあるのに、なぜもっと日本文化を生かしたものをつくらないのか。みんなあこがれているよ」とおっしゃっているそうです。イタリアでも京都のデザインをこれから勉強したいので、関西展をやってほしいということで、来年ミラノで「関西展」を計画しております。日本とイタリアの文化を紹介してお互いが学び合えば、そこに何かいいものが出てくるのではないかと考えています。

日本らしさという点では、現代ファッションに京友禅の模様をあしらったり、日本の伝統素材であるクマ笹を生かして抗菌性の高い繊維をつくる企業が出てきています。また、清水焼のテクニックを使ってセラミックスをつくる京セラさんや、伝統的な染色技術を最先端のプリント技術に生かすロームさんなど、日本の文化をベースにして、世界に通用するものをつくろうという動きがかなり出てきています。自分たちの〈伝統文化〉＋〈近代技術〉を使って何か新しいことをやっていこうということになりつつありますので、これらをどんどんこれから伸ばしていけば、コストだけではなくて、世界に通用するような品物ができるのではないかと思います。

河合　そのときに日本人がもうちょっと自信をもってやればいいんです。今まで向こうを上に立てて見るから、自分のものを出すのに躊躇してたけど、これからは平気でどんどん出していったらいいと思います。おっしゃるように、そういうものと近代的な科学を融合させるのは、日本は絶対できますからね。

秋山　安くていいものだけでは、とてもあの勤勉さで日本の二五分の一の労働賃金の中国には勝てないですからね。

河合　私は「おもろい」というのが文化だとも思うんですね。そういう意味で、文化というのは、芸術だけでなく、例えば中小企業の方々がいろいろ考えることも。そういうときに、ありがたいことに割と平気でみんな垣根を越えるんですね。

文化人の本音 河合隼雄文化庁長官対談

別に学歴がどうとかいわずに、「おもろいやないか」言うたらパッといっしょにやるというか、この気風が関西にはありますので。

秋山 それを外に発信する力が日本は弱いですね。

河合 そう。ちょっと弱いですね。がんばってる人は、今、海外でやっておられますけど……。

秋山 日本発、関西発でなければいけないと思います。

河合 そうそう。それを売り出す、あるいは売り込むためには、文化庁ももっと積極的にがんばっていかなきゃいかんと思います。今、観光の話でも国土交通省と、それから映画やアニメや漫画を外国で売っていこうという話は、経済産業省とやっているんです。文化庁が文化というほうの片足になって、もう片足を経済のほうでやっていくという新しい動きがあります。いろんなところがいっしょにならないとだめです。

秋山 経済の活力も文化ですし、観光の原点も文化ですからね。たしか、『文明の衝突』を書いたハンチントンが、「文化が持続的経済発展の決め手になる」と述べていますが、すべてそういうかたちで、文化がベースになってこなければいけないと思います。そういう意味で、発信力を我々も大いに強めていく必要があります。

河合 それにはちょっと工夫がいりますので、お互いが垣根を破っていっしょに協力して新しいものをつくっていくということにしたいと思いますね。

秋山 関西地域では、今、せっかく長官から「関西元気文化圏構想」を提唱していただいたので、地元としても官民を挙げて協議会をつくりまして、今、共催事業をたくさん増やしているところです。同時に、自分たちでも取り組んでいくため、「関西文化の日」として一一月一五日、一六日に、公設の美術館、博物館を無料開放する活動をスタートします。まず皆さんにそういうものに親しんでもらおうと思っています。

河合 無料開放のときに、できるだけ働き盛りの人が家族を連れていくように、そのキャンペーンもやりたいと思いますね。

秋山 また、「花と緑・光と水懇話会」というのをつくりまして、はんなりして、まったりした町をつくっていこうという取組を始めたところです。花や緑があると同時に、文化もあり夜景もきれいで、水ももう少しきれいにして、水の上から見た都をつくっていこうと考えています。

中之島に二二の橋があるそうですが、来年、三つでも四つでもいいからライトアップを行いたいと考えています。今は、夜遅くなると御堂筋が真っ暗になるなど、大阪は二四時間都市になってないものですから。

河合 それと日本がもう一つがんばらないかんのは、夜遅く芝居やコンサートが済んでから、飲んだり食べたりできるところがね。ちょっと早く閉め過ぎるでしょう。

秋山 そうそう。早く閉め過ぎなんです。

河合 それを楽しめるようにしないと。

秋山 二四時間都市。夜中までとはいいませんが、一二時、一時までね。

河合 せめてそれをもうちょっと考えたら変わってくると思うんです。

最後に、皆さんに伝えたいメッセージというのはございますでしょうか。

秋山 そうですね。もっと外国の方にリピーターとして何度も日本に観光に来ていただいて、本当の日本を見てもらうことが大事だと思います。今のままでいくと、昔、『日本の自殺』という本がありましたが、要するに西欧の近代化に追いつけ追い越せであまり夢中に走り過ぎて、自律心とか、文化を忘れて、このままでは日本の自殺になる、という内容だったと思います。さきほど長官がおっしゃったように、日本のよさをもう一度見直して、日本の文化を大いに盛り立てていきたいと思います。そうしたことが自分の自信にもなるし、関西の発展、日本の発展にもなり、世界貢献にもつながると思いますので、経済界としても大いにがんばってまいります。

その契機となったのが、長官ご提唱の「関西元気文化圏構想」で、これが一つのきっかけになると期待していますし、また、なると思っています。

河合 がんばっていきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

（了）

文化庁の抜穴 河合隼雄

文化力としての祭

文化で日本を元気に、ということを提唱し、大方の賛同を得ている。「文化」といってもカバーする範囲は広いが、その中の大切なものとして「祭」がある。

日常の決まり切った生活を飛び出して、非日常の空間の中で、超越的な存在の守りのもとに、人間性の燃焼を図る。それは、日常生活には考えられない、豪華さや活力に満ちている。これによって、日々の生活に新たな力を与える。まさに、文化力である。

先日は、全国的に有名な岸和田の「だんじり祭」を観覧した。勇壮かつ美しい。外国からの多くの大使も感嘆の言葉を発していたが、これぞ、日本の祭と感じられる。

祭は下手をすると形骸化し、根本の精神が消え去るようなこともあるが、だんじり祭は実に生き生きとして、活力に満ちている。

大阪・泉州地域では、「祭」の国際サミットの計画もあるとか聞いているが、祭の力で世界中が元気になるとすばらしいと思う。

文化庁 提言

文化で日本を元気にしよう

文化庁長官
河合隼雄

1 はじめに

現在、日本は経済不況により元気がなくなり、また社会的にも不安が増しているといわれています。しかし、私が平成一四年一月に文化庁長官に就任して以来、日本全国を回って、日本人は各所に豊かな文化をもち、大きい力を潜在させていることを知りました。

そこで、「文化で日本の社会を元気にしよう」ということで始めたのが、「関西元気文化圏」です。私がこんなことを考えた背後には、自分の専門の心理療法の仕事で、気分が沈んで落ち込んでしまっている人が、だんだんと文化的なことに関心をもち、創造的な活動をすることによって、そのような心の落ち込みを克服していく、という経験があります。つまり、不況のときに「文化」のことなど考えられない、というのは間違いで、文化をさかんにすることは、経済のほうにも波及効果をもつのではないでしょうか。

また、なぜ関西からなのか、という点については、現在の日本が、政治・経済のみならず文化においても、「東京一極集中」であることが挙げられます。地域には多様な文化があり、日本の各地からそれぞれの元気な文化が全国に発信されることが望ましいのですが、まずは、歴史と文化の蓄積があり、人材の豊富な関西から始めることにしました。

2 関西元気文化圏の取組について

このような考え方に基づきスタートした「関西元気文化圏」は、関西から文化関連の情報が活発に発信され、関西から日本全体を活性化させることを目的としています。具体的には、文化団体や企業、自治体、および文化庁が実施する事業や文化活動に共通のロゴマークを使用し、一体的に広報を行うことで、みんながつながって大きな力を生み出すことを期待しています。

この取組は本年の三月に文化庁が「関西元気文化圏構想」として提唱したものですが、その後の取組を通じて、去る八月六日には、「関西元気文化圏」の趣旨に賛同する企業、経済団体、報道機関や行政機関等の八七団体により、関西にかかわる方々がみずから「関西元気文化圏」を推進するための「関西元気文化圏推進協議会」が設立されました。これにより関西地域がみずから「文化で関西から元気になる」ことを目指して動き始めました。

また、関西元気文化圏では団体や企業だけではなく、生け花やコーラスといった個人の活動でも参加できるようになっています。九月末現在の参加事業の登録数は九〇〇件を超え、多くの方々が共通のロゴマークを使用し、「文化で関西から元気になろう」といっしょに活動してくださっていることがうかがえます。これが、まさしく人々を元気にする力＝「文化力」だと考えています。

3 「文化力」について

さきに「日本は不況で落ち込んでいる」というように書きましたが、これは「経済力」優先・重視の考え方からくるものです。経済力という観点からみれば、確かに今の日本の状況はかんばしくありません。しかし、それで国民全体が落ち込むのではなく、不況であっても文化に触れることで日々の活力を取り戻し、社会全体を活性化することで「経済力」も再生していくのではないか、と考えています。実際に、この「関西元気文化圏」を発表したときには関西経済界からの反響が予想以上に大きく、皆さん「おもろい、おもろい」と言って積極的に協力していただいています。

通常「文化」といった場合、演劇、音楽、映画といった芸術や、歴史的建造物、伝統芸能などを考えがちですが、衣食住や生活様式、価値観など、人間と人間の生活にかかわることすべてが「文化」です。「文化」は一部の愛好者だけのものではなく、私たち一人ひとりが「文化」の担い手なのです。一人ひとりが文化に触れることで、それぞれのもつ力を存分に発揮し、自分たちから元気になっていこうという思いを「文化力」という言葉に託しています。

4 今後の展開について

現在では既に関西地域の方々がみずから「文化力」という考え方を受け入れ、主体的に活動していただけるようになってきています。関西側で独自に取り組む事例の一つとして、一一月に「関西文化の日」というイベントが行われます。これは、関西元気文化圏推進協議会および関西広域連携協議会により、関西に住む人々がもっと文化に触れ、親しむことを目的として、関西地域の博物館・美術館の協力のもと一一月の一定期間を使って博物館・美術館の無料観覧を行うというイベントです。これからは関西の各団体とより一層連携を深め、こういった事業がどんどん行われるようにしていきたいと思います。

さらに私が思うのは、ふだん文化に触れる機会が非常に少ない、働き盛りの四〇歳、五〇歳代の男性に、どのように文化に触れていただくかということを考えなければならないということです。本年一〇月に開催された文化庁舞台芸術国際フェスティバルのアジア・オーケストラウィークでは、試行的にいくつかの企業を通じてそういった方をオーケストラの演奏会に優先的に案内するようなことをやってみました。まだまだ小規模ですが、今後も機会をとらえて続けていきたいと思っています。

このように、関西のもっている「文化力」によって、関西を元気にし、ひいては、日本中も元気にするように努力したいものです。そして、関西からの文化発信は、世界中にも広がっていくことでしょう。

施策紹介

関西元気文化圏とは？

文化庁文化広報推進室

1 「関西元気文化圏」の発足

三月一七日に行われた河合隼雄文化庁長官の「関西元気文化圏構想」に対して、関西の二府四県（京都府、大阪府、滋賀県、兵庫県、奈良県、和歌山県）や経済団体、関係事業者、報道機関などの代表者五〇人が賛同して五月二二日に「関西元気文化圏発起人の会」が発足。さらに、八月六日には三重県、福井県、徳島県の三県を加えた二府七県に圏域を広げて、関西における推進組織である「関西元気文化圏推進協議会」が設立され、積極的な協力体制の枠組みのもと、文化団体や企業が行う文化関連事業、自治体の関係事業、文化庁の関係事業など多様な文化活動の展開による文化圏の一体化・活性化の一層の推進にいっしょに取り組んでいます。

「関西元気文化圏」は、関西から日本の文化が力強く発信されることをねらいとしています。

2 「文化」について

「文化」というと、演劇、音楽、映画といった芸術や、歴史的建造物、伝統芸能などの文化財だけに限定して考えがちですが、衣食住や生活様式、価値観など、人間と人間の生活にかかわることすべてが「文化」です。「文化」は一部の愛好者だけのものではなく、私たち一人ひとりが「文化」の担い手なのです。したがって、「関西元気文化圏」には、文化団体や企業のみならず、一個人でも参加することができます。

また、日本の社会の活力を取り戻すために私たち一人ひとりがもっている「文化力」を発揮することの大切さを呼びかけるため、「文化力ロゴマーク」を作成、普及していくこととしました。

関西から 文化力 POWER OF CULTURE

「文化力」ロゴマーク

3 「関西元気文化圏」への参加について

文化庁および関西元気文化圏推進協議会では、関西地域における文化活動の充実や文化圏の一体感を醸成することをねらいとして、文化に関連するさまざまな活動や事業を主催する方々に対し、その自律と協調の精神を尊重しつつ、共通のロゴマークの使用並びに協働による広報活動へいっしょに取り組んでいただける方々の参加を呼びかけています。「関西元気文化圏」の参加事業に登録されると、次の特典が得られます。

なお、九月末現在で九〇〇件を超える事業の参加をいただいています。

①「関西元気文化圏参加事業」名義を使用した活動や事業の実施や広報

②「文化力」ロゴマークを使用した活動や事業の実施や広報

③「関西元気文化圏Webサイト」（文化庁提供）への掲載やマスメディアによる広報協力

④文化庁長官メッセージ等の使用

【募集内容】

京都府、大阪府、滋賀県、兵庫県、奈良県、和歌山県、三重県、福井県、徳島県にまたがる関西地域で、申請時から6か月程度以内に行われる予定の文化関連活動や事業を対象とします。

主催者の団体・個人の別、営利・非営利の別は問いませんが、主催者の責任において実施される事業に限ります。

【申し込み方法】

「関西元気文化圏Webサイト」（http://bunka-ryoku.goo.ne.jp/）において、オンラインによる申請・登録を行うことができます。

また、書面での申請をご希望の方は、返信用封筒（宛先を記入し、80円切手をはったもの）を下記までお送りください。

文化庁文化広報推進室内
関西元気文化圏事務局参加登録担当
〒100-8959
東京都千代田区霞が関3-2-2
TEL：03-5501-2610
FAX：03-3581-8457
eメール：info@bunka-ryoku.goo.ne.jp

施策紹介

「関西元気文化圏」における文化庁主催事業について

関西元気文化圏の一環として、文化庁が関西において実施する事業についてご紹介します。本年の一一月以降に行われる主な事業は以下のとおりです。

1 国際文化フォーラム
2 文化庁舞台芸術国際フェスティバル
3 文化庁芸術祭
4 伝統文化の祭典～人間国宝in関西～

1 国際文化フォーラム

国際文化フォーラムでは、内外の著名な文化人・芸術家が関西に集い、「文化の多様性」を共通テーマに講演、討論、座談会を開催し、世界に向けて文化のメッセージを力強く発信します（日程は次ページ表参照）。

開催される行事のうち、次の三つの行事については、一般に公開されますので、傍聴希望の方は、次ページ表を参照願います。

◎討論「オペラ・都市・社会」
（一一月一〇日　滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール）

◎討論「文化芸術と科学技術」
（一一月二四日　国立京都国際会館）

◎座談会「外交官が見た日本の魅力と文化多様性」
（一一月二五日　兵庫県公館）

2 文化庁舞台芸術国際フェスティバル

我が国トップレベルの芸術家・芸術団体と海外の芸術家・芸術団体が競演する機会を提供し、世界水準の舞台芸術の海外への発信と国際交流の推進を図る、「文化庁舞台芸術国際フェスティバル」は、今年で二回目の開催となりますが、関西元気文化圏の一環として本年から東京と関西地域での開催となりました。一一月

以降は、下表の四公演が予定されています。

中でも、昨年非常に好評をいただきました「ポップアジア」については、一日目を「グルーヴ・オブ・アジア（Groove of Asia）」として若者に人気の高い出演者による旬のコンサートを、二日目を「ヴォイス・オブ・アジア（Voices of Asia）」と銘打ち、アジアを代表するようなアーティストの歌声をそれぞれ提供します。主な出演者は、一日目はLOVEHOLIC（ラブホリック）（韓国）、CRAZY KEN BAND（クレイジーケンバンド）（日本）、二日目はNicholas Tse（ニコラス・ツェー）（中国〈香港〉）、CHARA（チャラ）（日本）となっています。

3 文化庁芸術祭

本年の文化庁芸術祭は一〇月一日に開幕し、一一月三〇日までの日程で行われます。今年は関西における参加公演の期間を一〇日間から三〇日間に拡充し、また関東・関西でそれぞれ芸術祭大賞を贈賞するなど、関西においても関東と同規模で行われるようになりました。各々がエントリーをして芸術祭大賞を目指す「参加公演」については関西での日程は一〇月三一日で終了し（関東においては一一月一〇日まで）、年明けの授賞式を待つのみとなっています。

一一月に予定されている主催公演は、近松門左衛門の生誕三五〇年、没後二八〇年を記念して『平家女護島（へいけにょごのしま）』ほかの文楽公演〔一一月二日～二四日：国立文楽劇場（大阪府）〕、上方落語、浪曲、地唄箏曲、上方舞、京舞など、上方に伝承されているさまざまな芸能を一堂に会し、名人たちが競演する「上方芸能特選会～名人の至芸～」〔一一月二五日（火）：国立文楽劇場（大阪府）：桂米朝、桂春団治、井上八千代、山村楽正ほか出演予定〕、関西出身の映画監督たちの名作を集めた上映会「日本映画名作鑑賞会」〔一一月五日（水）～一九日（水）：京都文化博物館（京都府）〕などが行われます。

4 伝統文化の祭典 ～人間国宝in関西～

「人間国宝」という言葉は聞いたことがあっても、実際どういう人たちがそう呼ばれ、どのような制度に基づいているの

文化庁舞台芸術国際フェスティバル　11月以降の公演

文化庁主催行事名	開催日	開催場所
『西風のコンチェルト』	11月4日（火）	ザ・シンフォニーホール（大阪府）
アジアのスーパー・ガラ・コンサート	12月2日（火）	ザ・シンフォニーホール（大阪府）
管弦楽と伝統芸能の幸福な出逢い『鐘の音』	12月5日（金）	京都コンサートホール（京都府）
ポップアジア2003	12月25日（木）、26日（金）	大阪厚生年金会館大ホール（大阪府）

文化庁　国際文化フォーラム2003　—World Cultural Forum 2003—

◎一般公開討論・座談会

一般傍聴募集中

討論「オペラ・都市・社会」（平成15年11月10日　滋賀県立芸術劇場　びわ湖ホール）

○オペラが、情報化、グローバル化が進む21世紀の変貌する社会の中で持ちうる意味に関する講演及び討論

〈参加者〉■イオアン・ホレンダー（ウィーン国立歌劇場総監督）　■若杉弘（びわ湖ホール芸術監督）
■中村孝義（ザ・カレッジ・オペラハウス館長）　■河合隼雄（文化庁長官）

〈問合せ先〉滋賀県県民文化生活部県民文化課　国際文化フォーラム担当
Tel:077-528-4630　Fax:077-528-4960　E-mail:s240001@pref.shiga.jp
（財）びわ湖ホール　国際文化フォーラム担当
Tel:077-523-7150　Fax:077-523-7147　E-mail:koho@biwako-hall.or.jp

討論「文化芸術と科学技術」（平成15年11月24日　国立京都国際会館）

○文化芸術と科学技術の接点の現状紹介と今後の展望に関する講演、事例報告、討論並びに鼎談

〈参加者〉■小平桂一（総合研究大学院大学長）　■河口洋一郎（東京大学教授）
■トッド・マコーバー（マサチューセッツ工科大学教授：米国）
■金鍾琪（東西大学教授：韓国）　■稲盛和夫（稲盛財団理事長）
■中村桂子（JT生命誌研究館館長）　■河合隼雄（文化庁長官）

〈問合せ先〉近畿日本ツーリスト　イベント・コンベンション・コングレス事業部
「国際文化フォーラム」係
Tel:03-3263-5581（受付時間　9:30～17:30）
Fax:03-3263-5961　E-mail:bunka-forum@or.knt.co.jp

座談会「外交官が見た日本文化の魅力と文化多様性」（平成15年11月25日　兵庫県公館）

○文化多様性をめぐる世界の潮流及び外国人の目からみた日本文化の多様な魅力に関する講演及び座談会

〈参加者〉■ドミンゴ・シアゾン駐日大使（フィリピン）　■ミハイル・ガルージン公使（ロシア）
■ヤドヴィガ・ロドヴィッチ公使（ポーランド）　■磯村尚徳（パリ日本文化会館館長）

〈問合せ先〉兵庫県県民政策部県民文化局芸術文化課　国際文化フォーラム担当
Tel:078-362-3171　Fax:078-362-4260　E-mail:geijutsubunkaka@pref.hyogo.jp

◎専門家間の座談会・討論（一般傍聴なし）

座談会「演劇の未来　—大阪から世界へ—」
（15.11.25　大阪迎賓館）
浅利慶太（演出家・劇団四季芸術総監督：予定）／キム・ジョンオク（国際演劇協会名誉会長：韓国）／徐暁鐘（中国戯劇家協会副主席：中国）／チェザーレ・マッツォーニス（フィレンツェ歌劇場顧問：イタリア）

座談会「文化の多様性への対応—21世紀の美術館の課題—」
（15.11.26　二条城）
高階秀爾（大原美術館長・元国立西洋美術館長）／ジャン・フランソワ・ジャリージュ（ギメ美術館長：フランス）／ジャルマン・ヴィアット（ケ・ブランリー美術館長：フランス）／ロバート・アンダーソン（前大英博物館長：英国）／ラジーヴ・ローチャン（ニューデリー国立近代美術館長：インド）

座談会「グローバリゼーションと芸術家のアイデンティティー」
（15.11.26　西本願寺・書院）
三浦尚之（福島学院大学教授・ミュージックフロムジャパン芸術監督）／ロビン・アーチャー（メルボルン国際芸術祭芸術監督：豪州）／オーネット・コールマン（ジャズ奏者、作曲家：米国）／オズワルド・ゴリホフ（作曲家：アルゼンチン・米国）／ジョン・ロックウェル（ニューヨークタイムズ編集者：米国）

討論「文化による協調と共存」
（15.11.27　薬師寺）
平山郁夫（東京藝術大学長）／前田耕作（和光大学名誉教授）／肥塚隆（大阪大学総合学術博物館長）／長崎暢子（龍谷大学教授）／秋山光文（お茶の水女子大学教授）／イワヒム・バウツェ（和光大学教授：ドイツ）／サイーダ・ヴァンダル（ラホール国立芸術大学長：パキスタン）／ラジーヴ・ローチャン（ニューデリー国立近代美術館長：インド）／ジャン・フランソワ・ジャリージュ（ギメ美術館館長：フランス）

URL: http://www.bunka.go.jp/forum.2003/

かという点に関してはご存じない方もいらっしゃいます。

今回文化庁では、「重要無形文化財の指定・認定制度」の普及を目的として、関西にゆかりのある人間国宝の方々のご協力をいただき、「芸能編」と「工芸技術編」に分かれた座談会を中心にして人間国宝の生の声を聞く機会を設けることとしました。

「芸能編」においては能シテ方の片山九郎右衛門氏、古典落語の桂米朝氏、狂言の茂山千作氏、常磐津節浄瑠璃の常磐津一巴太夫氏、歌舞伎立役の中村鴈治郎氏、人形浄瑠璃文楽人形の吉田玉男氏、「工芸技術編」においては、羅・経錦の北村武資氏、螺鈿の北村昭斎氏、木工芸の中川清司氏、衣裳人形の秋山信子氏、截金の江里佐代子氏が出演予定です。また、芸能実演として、「文楽『解説　文楽人形の遣い方』」「京舞井上流『紅葉売』」の紹介も行われます。（一一月二八日（金）：ウエスティン都ホテル京都（京都府））

「関西文化の日」パンフレット

関西元気文化圏推進協議会主催事業について

関西地域の経済団体、企業、報道機関および行政機関等がみずから「関西元気文化圏」を推進するために設立された「関西元気文化圏推進協議会」において、一一月に予定されている主催事業「関西文化の日」をご紹介します。

「関西文化の日」

関西２府７県（福井県、三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、徳島県）内の美術館・博物館などの文化施設の協力を得て、11月の一定期間、各館において無料観覧日（原則として常設展）を設け、地域内の方々が文化に触れる機会を創出します。

〈実施機関〉

平成15年11月1日(土)～3日(月・祝)もしくは2・3日、3日……〔7施設〕
平成15年11月8日(土)～9日(日)……〔2施設〕
平成15年11月15日(土)～16日(日)の2日間もしくはどちらか1日…〔106施設〕
平成15年11月23日(日)……〔1施設〕

〈対象鑑賞者〉

すべての方の入場が無料となります。

各館によって対象期間が違いますので、詳細はホームページでご確認ください。

http://www.kansai.gr.jp/kc/bunka/

【「文化力」ロゴマークの新たな展開】

関西元気文化圏共催事業の一つで「阪神タイガース御堂筋パレード」のために作成された「阪神から文化力」ロゴマーク

今後は、「文化力」ロゴマークが、企業等の行う文化活動や社会貢献活動を支援するものとなるようにしていきたいと考えています。

懇談会
河合隼雄文化庁長官と関西在住新進芸術家との懇談会

●出席者（敬称略）

くまざわあかね　落語作家
佐々木大（ささきだい）　バレエダンサー
高橋雅彦（たかはしまさひこ）　撮影助手
土田英生（つちだひでお）　劇作家・演出家
山下敦弘（やましたのぶひろ）　映画監督
山村若（やまむらわか）　日本舞踊家
河合隼雄（かわいはやお）　文化庁長官
寺脇研（てらわきけん）　文化庁文化部長

はじめに

河合　現在文化庁では、関西から文化に携わる人がそれぞれ自分流に元気にしていくという「関西元気文化圏」をやっています。今日は若い方に来ていただいて、本当にうれしく思います。

くまざわ　落語作家のくまざわと申します。落語作家の小佐田定雄のところで今勉強させていただいています。うちの師匠は、桂米朝一門の皆さんや立川志の輔師匠、林家こぶ平師匠、桂文珍師匠などに台本を提供していまして、私も主に米朝一門の方と勉強させていただいています。

去年、落語の表現のいろんなことが知りたいと思って、大阪で、昭和一〇年ごろの生活を体験してみました。

河合　どういうことですか？

くまざわ　冷蔵庫も洗濯機も電話もない生活を一か月やってみました。落語をこれで今まで以上にわかったような気がしています。

河合　それはおもしろいですね。

佐々木　バレエダンサーの佐々木です。六歳からバレエをやっているのですけれども、一五歳くらいから本気で取り組みだしまして、コンクールなどに挑戦していました。二〇歳くらいからロシアのモスクワへ勉強しに行きました。現在、関西を中心に活動し、芸能プロダクションにも所属しています。普通のバレエダンサーの場合とはまた違うところに身を置いていますので、バレエというジャンルにこだわるのではなく、バレエ以外のジャンルにも進んでいきたいです。これからどんどんバレエも変わっていくと思いますから。

高橋　初めまして、高橋です。平成一〇年度の文化庁芸術家在外研修員で、イタリアに一年間留学させてもらいました。現在は撮影助手の仕事をやっています。

河合　撮影助手というのは何をやってらっしゃるのですか？

高橋　例えば映画とか、コマーシャルなどの撮影のときに、カメラマンの下に撮影助手と呼ばれる人間が何人かつきます。欧米と日本では撮影のシステムが違いまして、助手の役割も異なるのですが、欧米では助手の仕事として存在しないことも、日本では成り立っています。例えば

こういう懇談会を撮影したりするときに、露出を調整したりとかフォーカスを合わせたりとか、そういった仕事が撮影助手の仕事です。

山村　山村でございます。上方舞山村流では実は一五〇年ぶりぐらいの男の子として生まれました。女性の家元が多かったせいか、そのために上方舞というのがどうしても従前は女性の踊り、舞のように思われています。しかし、家元になった時点で、上方の歌舞伎舞踊もやっていきたいと思いまして、振付も歌舞伎舞踊をいろいろと勉強させていただいています。

山下　山下です。大阪芸術大学映像学科に入学しまして、そこで映像製作として撮った『どんてん生活』という作品が、運よくいろいろ海外の方に評価されました。ここにいる皆さんはたぶん関西生まれなのでしょうが、引っ越しが多い家庭だったので、どこが故郷というのはないですけれども、でも気づいたら結局関西がいちばん長く住んでいたことになるので、関西が地元という感じです。

土田　僕も愛知県出身で、関西ではないのですが、京都の立命館大学で演劇を始めました。一度東京に行って俳優になろうと思った時期があったのですが、挫折をして、帰ってきた場所が学生時代を過ごした京都だったものですから、そこで劇団をつくって、今まで一四年間、京都を拠点に活動しています。最近は、テレビや映画のほうの脚本を書いたりすることにも興味が出てきています。

●くまざわあかね氏
本名：熊澤あかね。昭和46年10月1日生。関西学院大学で古典芸能研究部に所属。大学卒業後、小佐田定雄のもとに入門。平成12年国立演芸場第1回大衆芸能脚本コンクール（落語部門）優秀賞受賞。平成14年大阪市きらめき賞、咲くやこの花賞受賞。平成14年度文化庁国内研修員。

河合　ありがとうございました。

　みんな、すごくユニークな方々ばっかりで、しかもジャンルはものすごく違いますから、話がかみ合うかどうかわからないですが、いちおう関西ということでくくらせていただきます（笑）。

東京vs関西

河合　なにか関西人として、こういうことを感じているとか、やっているとか、そういうところはありますか。あまり意識しませんか。

佐々木　やっぱりどんなジャンルにしても、中心になるのは東京が多いですけれど、僕も関西に残っていて、自分の実力とかやり方では負けていないという自負があります。でも、ダンサーになるための教室やバレエ雑誌やなんかにしても、東京に比べれば関西は半分くらいしかない部分もあるのです。

土田　僕も佐々木さんがおっしゃったことと気持ちはいっしょというか、意地があるのですね。京都で演劇を始めたときにもかかわらず、今やっぱり週に二回くらい東京に通っています。呼んでくれる人からは、「東京に住んでくださいよ」と言われます。「新幹線代も大変なのですよ」みたいに言われるのですけれども、自腹で出しても行きますと言います。やっぱり

●佐々木大氏
昭和47年7月27日生。6歳より母である佐々木美智子のもとでバレエを始める。平成3年国立ロシアバレエ団にプリンシパルとして入団。平成14年新国立劇場『ドン・キホーテ』ゲスト出演。平成6年第5回ジャクソン国際バレエコンクール第1位。平成12年度（第51回）芸術選奨文部科学大臣新人賞（舞踊部門）受賞。

あたりまえのように演劇の世界でも、ある程度活躍しだすと、皆さん拠点を東京に移されるので、なんとか関西にいながら同じように活動できないかと、本当に思いますね。

寺脇　今年、芸術祭を今までの東京の延長ではなく、関西でも多くの公演を行い、審査員を組織して、関西にもきちんとした評価が行えるように考えています。

土田　今までは本当に劇作家というのが東京にしかなかったのですけれども、あるとき関西の戯曲賞の審査員に東京の方が来られて、関西で活動されている人たちを知って、それで岸田國士戯曲賞に、関西の作家がノミネートされて、三十何年ぶりかに関西から戯曲賞をとったのですね。それ以来戯曲の審査に関する見方も変わりました。最近はリサーチが全国を回るようになってきているのですね。だから、東京以外で活動しても大丈夫、という動きは今全体にあるような気がします。

河合　落語は関西だからってハンデはないですね。

くまざわ　そうですね。これは不思議なことですけれども、落語作家というのは東京にいないのですよ。東京から大阪に発注がかかります。

河合　映画の場合はいかがですか。東京と関西、何か意識される違いってありますか。

山下　そうですね、逆に僕は大学のとき関西人じゃないと思っていたのです。なので、関西の映画というと、関西弁を使わなきゃならないというのが僕にはわからなくって。関西弁を使うのは絶対何か違うなと感じて、最初から逆に関西を外していたのです。スタッフも地方出身者が集まったので、大阪じゃない日本のどこかにある架空の町という設定で作ったのですが、海外で紹介されたとき、「大阪スタイル」というようにパンフレットに書かれてしまいました。海外でもそうですが、やっぱり東京しか見ていないですね。東京以外で映画を撮ったということが珍しかったようです。そのようにして、海外に出してから大阪を意識しました。

高橋　撮影現場でいえば、東京と関西の違いという点では、東京の現場というのはすごく静かです。大阪とか、京都の撮影所もそうなのですが、本当に「本番」と言うまで、みんなしゃべっています。直前まで、スタッフどうしがまったく関係ない話で盛り上がっていたりするとか。イタリアに行ったときも同じような経験をしたのですが、本番の合図までもうしゃべりっぱなしです。実際完成した作品がどうかというのは別として、現場の活気としては関西のほうがあるのではないかと思います。

土田　皆さん当然プロフェッショナルなのですけれど、関西の現場には、なにかいい意味で、アマチュアリズムが残っている気がします。東京だと、どうしても

●高橋雅彦氏
昭和42年3月10日生。フリー撮影助手として活動中、数回にわたりイタリアを訪問。平成10年度文化庁芸術家在外研修員（1年派遣・映画分野）。帰国後、撮影助手として活動再開。平成13年でまイタリアでの研修をまとめた小冊子『ローマ発のとて』を発行。

●土田英生氏
昭和42年3月26日生。立命館大学入学と同時に演劇サークルに入る。平成元年劇団「B級プラクティス」（現・MONO）を結成。平成12年大阪市舞台芸術奨励賞、咲くやこの花賞、京都市芸術新人賞受賞。平成13年度文化庁芸術祭優秀賞（演劇部門）、平成14年京都府文化賞奨励賞受賞。平成15年度文化庁芸術家在外研修員（1年派遣・演劇分野）。

やっぱりカチッと決めてしまうような気がするのです。例えば僕が稽古場なりに行くと、例えば「作家さんですね」「劇作家さんですね」みたいなことになりますが、関西の現場だと、意外と「なあなあ」という雰囲気の中で、仕事ができるようなことがあります。

寺脇　そのほうがなにか、現場がスムーズに進行していくような感じがしますね。東京なんかだと、なにかそれこそ以前と違うことやろうとしたら、いやいや、それ違うじゃないですかという議論がどうしてもありますよね。関西では、何をやっても受け入れられるという雰囲気ですね。

山村　裏方は大阪の人間がやるとなにかうまくいくし、だれも緊張していないです。東京の国立劇場なんかではシーンとしていて、楽屋も皆静かですけれども、大阪はやっぱりどこかで騒いでいる。たばこを吸うのも気遣うようなのが東京の国立劇場だとしたら、大阪の文楽劇場なんかでは、どこでもたばこをスパスパ吸えるような雰囲気があります。それでも、本当にスムーズに仕事が運びます。大阪のほうが、なにか「ノリ」というか「間」というか、そういうものがあります。

河合　そういう感覚は、我々学問の世界とも似ていますね。

寺脇　さっき高橋さんのイタリアに行かれた話がありましたが、佐々木さんはロシアに行かれていたのですよね。

佐々木　ロシア人もどっちかというと関西に近いのですかね。本番だからというので変にピリピリすることなく、みんなでああだ、こうだと言いながらやっています。なにか気持ちいいです。東京ですと、ボスがいて、自分が希望されるところに常にはまり込んで踊らないといけない。ただ、ちょっと気になるのは、関西がいいといってしまうと、そこで終わっちゃうところがありますね。僕らは東京の者に対して対抗心はあるのですが、それはやっぱり絶対数とか市場のことを考えると、絶対勝てないわけですね。やはり東京で作られている作品の中には、関西にいるとどうしてもできないようなものもある。

●山下敦弘氏
昭和51年8月29日生。平成11年長編映画『どんてん生活』、平成14年長編映画『ばかのハコ船』。平成11年度映画文化に関する国際交流事業（東京国立近代美術館フィルムセンター）において『どんてん生活』をロッテルダム国際映画祭に出品。最新作『リアリズムの宿』が来春公開予定。

寺脇　どうしても評論したり、評価したりする人たちの市場も、絶対数は東京が多いわけですから。ただ今回、芸術祭を関西でやるということは、アーティストも育ってもらいたいけれども、それを評価する人にも育ってもらうという意味もあります。

●山村　若氏
本名：山村　武。昭和39年4月27日生。上方舞山村流の6代目宗家家元。平成4年6世宗家山村若を襲名。座敷舞と上方歌舞伎舞踊の伝統の維持継承に力をそそぐ。平成3年大阪文化祭奨励賞、平成13年度文化庁芸術祭新人賞（舞踊部門）受賞。

関西いろいろ

寺脇　東京と関西という話がひとしきり出ましたけれども、今関西の中でも、大阪があって京都があって神戸があって、また奈良とかある。関係性というか、これを意識なさるようなことが、もしあればお聞かせください。土田さんのお芝居は、京都で上演することが多いわけですか。

土田　悲しい話ですけれども、僕は関西の公演は大阪でやっているのです。京都は地元なのですけれども、京都でやるとお客さんが来ないのですよね。

寺脇　劇団は京都にあって、上演するのは大阪と。

土田　大阪の人はなかなか京都に出てこないですよね。遊びに来る以外では。やっぱり京都、神戸の人は、何か用事があると、大阪まで出ていくのですが、逆に大阪の人からしてみると、京都までわざわざ行く、という意識があるんですよ。

河合　大阪の人は、京都へ観劇に来ますか？

土田　演劇ではお客さんは来ないですね。古典しか見にこないです。

河合　落語はどうでしょうね。

くまざわ　京都と大阪の距離感は、私自身はそんなにないですね。大阪でやったりしますけど、京都に劇場もたくさんありますから。ただ、神戸はあんまり行かないですね。

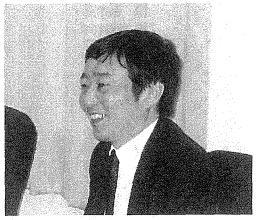
●河合隼雄文化庁長官

河合　神戸はちょっと外国みたいな感じがありますよね。大阪はフィルムコミッションが、ロケを誘致するのにずいぶん力を入れていますけれども、やっぱり大阪で仕事をなさるよりは京都で撮影になるほうが多いですか。

山下　現在は大阪のほうが多いですね。ただ、映画の数でいえば、圧倒的に東京、京都、大阪の順です。

河合　小さい町で映画のロケをやると、その映画を作っただけということだけじゃなく、ほかにもいろいろ出てきますよね。

山下　去年、大阪の守口市で短編を作りました。最初は軽い「ノリ」で、守口市の子どもたちを使って短編を撮ろうというだけの、予算もまったくない企画だったのですが、話をしていたら、守口市民がすごく盛り上がって、横のつながりが広がって、ロケバスの確保とか、ご飯の確保とか、子どもの誘導、車の手配とか全部やってくれたのです。自主制作のつもりだったのが、すごいキチッとした映画になりました。それで、先月完成になって、初めて守口市の市民文化センターで上映されて、夏休みに入ったばかりだったので、子どもたちやおばあちゃんが来ていて、なんかすごくうれしかったですね。ふだん、僕たちの映画を見てくれない層が、何かいっしょにやることで交流がもてるというのは、経験としてはすごくよかった。



●寺脇　研文化庁文化部長

おわりに

河合　さすがにみんな自分の世界をもっておられるというか、やっておられるという感じがすごく伝わってきますね。これだけちゃんと考えながらやっておられるわけですから、ちょっと元気出すと、そばにもっとパワーのある人がいて、お互いが関連し合いながら新たな文化をつくり出す。そして、それが地域的にも広がっていく……そういうふうに「関西元気文化圏」を推進したいと思います。

●11月号予告

◆長官対談◆
【文化人の本音】河合隼雄文化庁長官対談
蜷川幸雄　演出家
【長官コラム文化庁の抜穴】

◆特集◆

文化的景観の保護

【寄稿】
文化的景観の考え方と保存の意義……金田章裕
文化的景観の価値と保護……中越信和
文化的景観としての棚田の保護……中島峰広
【解説】
農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究について……記念物課

◆連載◆
【わがまちの文化振興条例】
熊本県
【著作権の保護とその例外】
【いきいきミュージアム～美術館・博物館事業レポート～】
大原美術館（岡山県）
【全国発掘調査ホット情報】
美利河遺跡（北海道）
【子どもたちから見た伝統的建造物群保存地区】
高岡市山町筋（富山県）
【外来語の現状とその解決のために】
……甲斐睦朗国立国語研究所所長
【文化体験プログラム支援事業】
福岡県杷木町
【日本の伝統美と技を守る人々】
檜皮葺・柿葺・大西安夫
【探訪　日本の世界遺産】
原爆ドーム（広島県）
【国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法】
銅鐸に描かれた絵（弥生時代）

◆文化庁ニュース◆
平成一五年秋の叙勲、褒章受章者が決定
平成一五年度文化庁舞台芸術創作奨励賞作品募集要領　ほか

編集後記

天候不順が続いた本年もようやく旬の作物のおいしい季節となりました。あと二か月くらいで今年も終わり。そろそろやり残したことを片づけていかなければなりません。

今月号は、今年の三月から始まった「関西元気文化圏」を特集しました。「文化で関西から元気になろう」というテーマで取り組んだ施策ですが、今年は阪神タイガースの優勝で大いに盛り上がった関西の波にうまく乗れたのではないかと思います。この号が出るころにはその盛り上がりを日本全国や、今まで文化活動になかなか触れる機会のなかった人々へと届けられるようにがんばりたいと思います。

ただし、「元気にしよう」ではなく、「元気になろう」ですから、皆様にまずは文化の秋を楽しんでいただければ幸いです。（K）

お詫びと訂正

本誌平成一五年九月号掲載『10月号予告』において、小澤正爽氏のお名前に誤りがありました。ご本人様および関係者の皆様にお詫び申し上げますとともに訂正させていただきます。

文化庁では、ホームページで、文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見、文化庁月報の感想などを、ホームページのご意見欄へお寄せください。

●ホームページアドレス●
http://www.bunka.go.jp

文化庁月報 10月号（通巻421）

平成15年10月25日印刷・発行

編集――文化庁
〒100-8959　東京都千代田区霞が関3-2-2
発行――株式会社 ぎょうせい
本社　〒104-0061　東京都中央区銀座7-4-12
本部　〒167-8088　東京都杉並区荻窪4-30-16
電話　編集　03（3571）2126
販売　03（5349）6666
URL：http://www.gyosei.co.jp
印刷所―ぎょうせいデジタル株式会社

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円　本体514円　送料76円
年間購読料6,480円
本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先
（株）ぎょうせい営業部広告課
電話03（5349）6657（ダイヤルイン）

©2003 Printed in Japan

ISSN 0916-9849

本誌は本文用紙に再生紙を使用しております。